連絡を取り、見学を申し込みました。私は、児童養護施設と乳児院合わせて3箇所の見学に行きましたが、ホームページだけでは分からない施設の雰囲気や子どもたちの様子等を知ることができました。ホームページで見るのと実際行ってみるのとでは全然印象が違ったので、見学は絶対に行った方がいいと思いました。

私が応募した施設は、福祉に関する試験、小論文、面接審査がありました。小論文は事前にテーマを知らされていなかった為、小論文の書き方を頭に入れて準備しました。面接は、話すことを前もって文章にして暗記していくと、文章を忘れてしまった際に何も言えなくなってしまうので、質問される内容をある程度想定し、「こういうことを聞かれたらこんなふうに答えよう」という気持ちで臨みました。私が面接で聞かれたことは、“なぜ他の施設ではなくて当施設なのか”、“児童養護施設ではなく乳児院を選んだ理由は何か”、“卒業論文は何をテーマに書くのか”等でした。

私はディズニーが好きなので、地元よりもディズニーに近い関東に就職したいと考えました。その為、就活中は1人で岐阜と千葉などを往復しており、少し心細かったです。また、内定が決まりそうな子の話などを聞くと不安になりましたが、友達とご飯に行くことでメンタル面でとても支えられました。

春からは、乳児院で働くことを通して、子どもたちが自分らしく成長していくことを支援していきたいです。大好きなディズニーが近くなることもとても楽しみです 。

就職活動体験記 －特別支援学校教員 採用－

心理臨床学科障害児心理専修4年
佐々本開斗（ささもと かいと）広島県・福山高校出身

「学校の先生」。この言葉が私の将来の夢になるとは、高校の終わりまで、思ってもいませんでした。勉強が好きなわけでもなく、憧れの先生がいたわけでもない私ですが、子どもたちの願いに寄り添うことを仕事とする「学校の先生」は他に類を見ない、輝いている仕事だと思い、いつの間にかそれを目指すようになっていました。

教員採用試験の勉強は、週6日活動している部活動に所属していたため、とても苦しいものでした。部活中、せっせと勉強をやっている友だちを見ると、焦りや不安で押しつぶされそうになります。そんな状況で部活動にも、教員採用試験にも結果を出さないといけなかったので、いかに短時間で効率的に勉強できるかを考えて行うように努力してきました。

たとえば、筆記試験の勉強をひとりで行うようにしたことです。友だちと同じ空間で勉強をすると、友だちのペースに気を取られ、自分のリズムや計画が崩れてしまいます。加えて、同じ自治体を受験する友だちも周りにいなかったので、試験について質問することもできません。ひとりで短時間集中しながら勉強することを徹底しました。

また、面接試験は人と対面する中で評価されるので、対人関係における振る舞いや話し方が大切です。これらを鍛えるため、初対面のコンビニの店員さんと雑談するなどして緊張に慣れる練習をしてきました。

これらの勉強や練習ができたのは周りの人たちのおかげです。部活動ではチーム運営や事務処理などを後輩や同級生が手伝ってくれました。面接練習も、知り合いの現職教員の方にご指導していただき、抜け目がないほど対策をすることができました。そして無事、第一志望である自治体の合格通知を受け取ることができました。

周りの人たちの支え無しで合格することはできません。周りの人に支えてもらうことが一番の試験対策です。これからも、支えてくれる人の存在を忘れず、「学校の先生」の道を歩んでいきたいと思います 。

教職インターンシップⅠ

子ども発達学科学校教育専修2年
相原柚子（あいはら ゆうこ）広島県・広島国際学院高校出身

約半年間に及ぶ小学校のインターンシップが終わりました。週に一回の子どもたちとの関わりが無くなると思うととても寂しく思います。

インターンシップ初日、これからの期待と不安を胸に配属された小学校へ向かったのを覚えています。私は「大学生の先生として勤めなきゃ」と必死に思いながら子どもたちと関わろうと、子どもたちが私に聞いてきたことに対して自分なりに分かりやすい発言や行動をとっていたつもりでした。ですが、実際は子どもたちの頭に？が浮かんでいるのが窺えるのです。帰宅途中、「分かるようにしていたはずなのになぜだろう」と悶々としていた初めの頃でした。

慣れた頃、あることに気付きました。それは、子どもたちにとっての私は、毎週来る“お姉さん”なのだということです。確かに、決まって木曜日に来て子どもたちと関わる人ではありましたが、“先生”ではなく“お姉さん”という言葉に引っかかりました。毎回お姉さんと呼ばれ「なぜだろう」と思い、一度落ち着いて考えてみることにしました。子どもたちのお願いをそのまま聞いたり、「好かれるためには」と考えたり、失敗するまいと気を張ったりと思い返せばたくさんの理由が挙がりました。そして、これらは共通して何事も自分目線で考えていた結果だということに気づいたのです。つまり、子どもたちのことを考えているように錯覚し、実はしっかりと向き合えていなかったのです。

後半から、子どもたち目線で物事を考えてみたり向き合ってみたりすると次第に先生と呼ばれるようになりました。もちろん、このことだけで変わったとは言えません。他にも反省したことはあります。しかし、私にとってこの経験は今までの考えがガラッと変わり大切なことを学ぶことができた良い機会になりました。

子どもたちは大人が思っている以上に相手の気持ちや機嫌を察知します。その中で教師の影響力は大きいです。今回の体験を糧に子どもの成長の足場となる人を目指していきたいと思います。

We Love こたつ

日本福祉大学　子ども発達学部ニュースレター

第23号 2020年2月17日発行

この号の主な内容

・教育実習体験記　特別支援学校実習
・教育実習体験記　中学校実習　1
・就職活動体験記 －社会福祉法人・保育士採用－
・就職活動体験記 －公立保育士 採用－　2
・就職活動体験記 －小学校教員 採用－
・就職活動体験記 －障害児施設 採用－　3
・就職活動体験記 －乳児院 採用－
・就職活動体験記 －特別支援学校教員 採用－
・教職インターンシップⅠ　4

教育実習体験記 特別支援学校実習

心理臨床学科障害児心理専修4年
下里祐希歩（しもさと ゆきほ）愛知県・東海学園高校出身

私は、愛知県の特別支援学校で、2週間教育実習をさせていただきました。2週間という日々は本当にあっという間で、1日1日が学びでいっぱいでした。この2週間で私が感じたことを、体験談として書かせていただきます。

私は、中学部2年生の配属で、クラスには5人の生徒が在籍していました。生徒の実態を聞いていたものの、初めはどのように関わったらいいのか不安でいっぱいでした。しかし、指導教諭の先生や副担の先生、同学年の先生方にアドバイスをいただきながら、生徒と関わっていくうちに、自然と生徒と関わることを楽しんでいる自分がいました。毎朝、スクールバスで登校してくる生徒を出迎え、1日が始まりまるのですが、「おはよう」と挨拶をしても顔を見るだけで、なかなか返事が返ってこない生徒がいたので、毎日「おはよう」と言葉をかけ、日頃から関わりを持つように心がけました。実習終盤の朝、その生徒が自ら私のところに来て、「おはようございます。」と言ってくれたときにはとても嬉しく思い、毎日続けることに意味があったのかなと感じられました。生徒はとても素直で、真っ直ぐな心を持っています。そして、生徒から学ぶことが多くあります。言葉がなくても、伝わるものがあり、伝えられることがある、そのことをとても感じた実習の日々でした。

指導教諭の先生をはじめとし、多くの先生方に支えられ過ごした2週間は、「特別支援学校の先生になりたい」という思いをさらに強くしました。特に指導教諭の先生から学んだことは多くあり、生徒の成長を共に喜ぶ姿はとても印象的で、生徒一人一人と向き合う事の大切さを改めて感じました。経験も無く、至らない点ばかりの私に「今日もお疲れ様でした。」「ありがとうございました。」と多くの先生方が言葉をかけて下さり、先生方の優しさと温かさを身にしみて感じました。終わってしまうのが寂しいくらい充実した2週間でした。関わってくださった方々には感謝でいっぱいです。

教育実習体験記 中学校実習

子ども発達学科学校教育専修4年
星野さやか（ほしの さやか）北海道・根室高校出身

中学校実習に関わり一番強く感じたことは、“地方の教育格差と問題行動のみられる子どもの関係”と、“私は教師に向いているのか”という2点でした。

私は実習に行く前、「すべての子ども達に権利を」「子ども一人ひとりの生きづらさをどのようにケアしていくか」といった、大きく言えば「子どもの福祉」を学んできました。しかし、実際の学校現場に行ってみて、自分のこれまで築いてきた教育観が通用するのか非常に不安になりました。また、自分は「教師に向いているのか」という想いも生まれました。

その想いは、問題を起こしている子どもと接している時やその対応に苦慮されている先生方と話している時に強く感じました。そして、そのような子どもたちとの関わりあいの中で気づいたことは、共通して勉強に行き詰まっていたり、家庭状況が不安定だったりするということでした。

しかし、学力向上委員や特別支援員の方々、大学の恩師との出会いによって、「自分は教師に向いているのか」という不安を払拭することができました。

その御三方からは、「通常学級の先生の中で、“子どもの福祉”を考えられる人が少ない。」「是非、あなたみたいな人に先生になってほしい。」「まだまだ大して学んでいないのだから、先生に向いていないのかもと簡単に言うな。」「先生に向いているのかいないのかということは、子どもたちが決めること。今は決めるべきではない。」というお言葉をいただきました。

以上の出来事によって、私の「教師になりたい」という気持ち

が大きくなりました。これから、様々な教育観をもつ先生方とお仕事をしていくと思います。私はそれを十分に受け入れ、常に子どもの福祉を考えることができる先生であり続けたいと思いました。そして教育機会の格差がみられる地域ではどのように教育活動を展開していけばよいのか、残りの大学生活で深く学んでいきたいです。

就職活動体験記　－社会福祉法人・保育士　採用－

子ども発達学科保育専修4年
今田芽久美（いまだ　めぐみ）愛知県・愛知工業大学名電高校出身

私は入学するまでは保育に対して曖昧なイメージしかなく、子どもと関わる仕事がしたいという気持ちだけで、こんなにも奥が深いものだとは思いもしませんでした。大学の講義での学びや保育園、児童養護施設、幼稚園と様々な環境での実習を重ねて模索していくうちに、自分の考える子ども観や保育に対しての様々な想いが芽生えていきました。

そこで大きなきっかけとなったのが、大学の授業の一環で参加した、全国の保育者の方々が集まる企画に参加したことです。そこで、自分が当時通っていた園で、とてもお世話になった先生に再会しました。その先生は、会った瞬間に私の顔を見ただけで名前を呼んで抱きしめてくれました。その瞬間の出来事は本当に嬉しく、これまで何百人の子どもたちを見てきたのにも関わらず、覚えていてくれたことはとても感慨深いものでした。この出会いがきっかけとなり、自分が通っていた頃とほとんど変わらない園舎や温かい先生方のもとでアルバイトをはじめさせてもらいました。そうすると、園の保護者の方々とも関わる機会が増えていきました。そこから私は、子育てに関して興味を持ち、卒業論文でも研究し、決して子育ては一人でどうにかできるものではなく、様々な人を結びつけ、子育てを通して、大人同士がつながり合うことのできる大事な営みであると学びました。

大学では、社会に出るための一歩として様々なところで沢山の人と出会います。私は、こうして4年間自分なりに学びを深めた上で、自分の卒園した園に就職を決め、4月から働くことになります。自分がお世話になった園や先生方に恩返しができるよう、この想いを大切にし、また、自分も目の前にいる子どもたち一人ひとりと真剣に向き合い、共に成長していきたいと思います。

就職活動体験記　－公立保育士　採用－

子ども発達学科保育専修4年
石田紗誉（いしだ　さよ）愛知県・西尾東高校出身

「就職活動で大切なことは何か」と尋ねられたら、試験勉強、ピアノ、自己分析も勿論大切だとは思いますが、私は「自分に自信を持つこと」だと答えます。

公務員保育士を第一志望として就職活動を行ってきました。しかし、本気で目指そうと決めたのは4年生の4月末頃。大学の公務員試験講座を受講してはいたものの、公務員になれたらいいな、くらいの感覚でした。

本気になってからは、隙間時間を作っては問題集や資料を開く癖をつけました。スタートが遅い分、効率重視で問題を解きながら解説を読んで覚えました。図書館で分厚い問題集を解いている人を見かけると、諦めそうになることもありましたが、挑戦だけはしてみようと思い、受験日の重ならない官公庁を探しては、片端から受験しました。

この方法は、結果的に「自信を持つこと」に繋がりました。効率よく苦手科目を中心に勉強したことは、焦りを解消しました。駄目元でも試験を経験することで、採用者の意図や求めている人物像が掴めるようになり、他の受験者を参考にすることもできました。何より、試験慣れから余裕が生まれ、自信を持ってアピールできるようになりました。自信を持つと、はっきり話せるようになるし、表情にも余裕が出てくると思います。それでも結果が伴わない場合もありましたが、「自分には合わないところだった」と思うようにしました。

もし、まだ期間に余裕があるのなら、在学中に多くの経験をすることをお勧めします。私は、元々様々なことに挑戦してみたい気持ちが大きかったため、大きな功績はありませんが、経験量は他の人よりも多いと自信を持って言えます。ボランティアやイベントへの参加、短期留学、課外活動で役職を務めるなど。大きな挑戦ではなくとも、この経験は就職活動の面接や小論文など、自分をアピールする場面で随分有利になりました。他の人にはない学びを得たことは、自身の強みとなり、自信にも繋がったのだと思います。

最後に、就職活動はいかに自分をアピールできるかが鍵だと感じています。諦めたくなる時もあると思いますが、そこで踏ん張ったことは何かに活きると思って頑張ってください。

就職活動体験記　－小学校教員　採用－

子ども発達学科学校教育専修4年
髙木歩水（たかぎ　あゆみ）愛知県・中部大学春日丘高校出身

私は岐阜県教員採用試験を受験し、岐阜県の小学校に合格することができました。教員採用試験に合格することができたのは、「行動に移す」「とことん考える」「沢山人と話す」ことが大学生活で磨かれたからだと思います。教員採用試験は筆記や面接など沢山の勉強があります。その土台となるものが大学生活やこれまでの経験です。沢山の経験を行い、そしてその経験を生かすこと、人に伝えることが教員採用試験では生かされました。

まず初めに、なぜ岐阜県で働きたいのか、教員になりたいのかを明確にすることから始めました。そこで岐阜県について知ろうと思い、3年時に大学のCOC＋の活動に参加をし、岐阜県で働く方々に取材をしたり、実際に仕事を体験したりしました。放課後デイサービスの方に取材を行った際、「普段からのご近所同士のつきあいが強いから、災害時に助け合えたことが岐阜県にいて良かった」とおっしゃっていたことが強く印象に残っています。困ったときは相談をする、声を掛け合う姿から岐阜県は「人と人とのつながり」が強いと感じ、岐阜県で働きたいと強く感じました。この気づきは、COC＋の活動に参加をしようと行動に移せたこと、実際に職場の方と話をしながら、肌で感じることができたからです。

自分の考えを持つこと、そして相手に伝える力は小論文や面接などで必要です。私はこの力をゼミの中で培ってきました。私のゼミでは、1つの文献をみんなで熟読し、気になったところをゼミの時間で討論をする活動を行ってきました。まずは自分でじっくり考え、そして言葉でみんなに伝える。みんなからの意見を聞き、さらに考えを深めるというサイクルを行うことで、考える力、話す力、聞く力がつきました。

私は教員採用試験に合格するための勉強よりも日々の大学生活の中で培ってきた力を生かすことができたことが合格につながったと感じています。共に大学生活を過ごしてきた仲間、サポートしてくださった先生方、そしてなにより4年間支えてくれた両親に本当に感謝をしています。教員を目指す皆さんにも是非、今の学びを大切にし、自分と向きあう時間を沢山作ってほしいです 。

就職活動体験記　－障害児施設　採用－

心理臨床学科障害児心理専修4年
永井のり子（ながい　のりこ）三重県・皇學館高校出身

私は、発達障害のある子どもたちが通う障害児施設で内定をいただきました。入学当初は特別支援学校教諭を目指し、勉強していましたが、サークル活動で障害児施設のボランティアをさせていただくことがあり、教師とは違う視点で、障害のある子どもたちの支援がしたいと思うようになりました。教師の道か福祉の道か悩み、ゼミの先生に相談しながら、本当にやりたいことを考えました。そして私は、教員免許を有した児童指導員を目指すことに決めました。3月から就職活動を始め、愛知県か地元である三重県、どちらで就職するのか決めきれずにいたので両方の県で施設の見学や実習を体験しました。障害のある子どもたちと関わる仕事がしたいという思いから、放課後等デイサービスを中心に幼児教室や入所施設なども回りました。多くの施設を回ることで、施設の特色がわかり、比較することができました。実際に自分の目で施設の雰囲気や取り組みを見させていただいた中で、「ここで働きたい」と思ったのが内定先です。職員の方とお話をさせていただき、1日体験に行くことになりました。個別療育、集団活動を通し、職員の方は子どもたちと一緒に楽しく療育プログラムを行っていました。一日の様子を見させていただき、よりいっそう働きたいという思いが強くなり、面接を受け、内定を頂くことができました。

就職活動は周りと比べてしまって焦ったり、やりたいことが分からなくなったりもしました。しかし、自分の長所短所を見つめ直す機会となりました。また面接では、笑顔の大切さや自分の言葉で伝えることの大切さを学びました。マナーやコミュニケーションスキルなど就職活動を通して身につけることができました。

内定先では、児童指導員として働くことになります。一人ひとりの個性を大切にしながら子どもたちに寄り添い、大学での学びを活かし、頑張っていきたいと思います。

就職活動体験記　－乳児院　採用－

心理臨床学科心理臨床専修4年
井戸優奈（いど　ゆうな）岐阜県・美濃加茂高校出身

私は、千葉の乳児院から内定を頂きました。はじめは福祉系にするか、企業にするか迷っていましたが、小さい子どもが好きなので、子どもの福祉施設への就職を志望しました。就職活動を始めたのは大学3年の3月中旬頃です。福祉系といってもいろいろあって調べるのが大変だった為、児童養護施設と乳児院に絞り、大学のキャリアセンターやリクナビ等で探したり聞いたりしながら、自分が行きたいと思う就職先を絞りこんでいきました。

福祉関係は、法人のホームページでしか応募情報が掲載されていないところもあり、その場合は個別に電話やメールで